

劉四爺：そうだな。

二強子：しかも仲人が1割取ることになってるんだ。なかったことにしたら、許六にも顔向けができねえ。

劉四爺：1割だと？ 銀貨20枚か？ あの野郎、またぼろい儲けをしやがって。

二強嫂：あんた、ばかなこと言ってんじゃないよ！ あの子の一生の問題なのよ……旦那さま、この人になんとか言ってやってください。

劉四爺：よその家のことはお奉行様だって手におえねえって言うだろう。わしが口を出すことじゃない。わしは知らん。

小福子：(二強子の足元にひざまずく) お父ちゃん、私のこと、かわいそうだと思うわないの？ (泣く)

二強子：(悲しむ) 父ちゃんはお前がかわいそうでならないんだ。父ちゃんと一緒に飢え死にするのを待つよりは、嫁に行く方がましなんだ。

二強嫂：あんた、それで平気なの？

小福子：お父ちゃん……。

二強子：立ちな。さあ立つんだ。(胸にいっぱい詰まった悲憤と涙をできれば全部吐き出してしまいたい) お前は俺の大事な娘だ。父ちゃんだって分からないわけじゃない。貧乏<sup>ウオトウ</sup>ってやつは人を殺しもするし、狂わせもする。俺は今日までずっと車を引いてきた。真冬の北風の中、真夏のギラつく太陽の下、この二本の足で必死に走り続けてきた。でも、満足にめしが食えたことなんか一日もねえ。この世で確かなものは窩頭<sup>ウオトウ</sup>\*1だけだ。他のものなんかあてにはならねえ。こんな世の中に生まれてきちまったのが、お前の運命<sup>きだめ</sup>なんだ。父ちゃんの言うことをきいてくれ。それに、許六に渡した、あの20枚の銀貨も取り戻すことはできねえんだ。

二強嫂：(絶望して) あんたは大馬鹿者の人殺しだ！ この子はもうおしまいだ。私も殺してくれ。(死に物狂いで二強子にむしゃぶりつく)



小福子：お父ちゃん……

\*1窩頭：トウモロコシやコウリヤンなどの粉を水でこねて蒸したもの。貧しい家庭の主食であったので、貧乏の代名詞になっていた。

二強子：(後ろに身をかわす) また殴られてえのか！

二強嫂：さあ、殴れ、死ぬまで殴ればいい！ 死ねば楽になるんだ。

二強子はいきなりげんこつで殴りかかる。2人はもつれ合い、その場は騒然となる。

二強子：ぶち殺してやる！

大個子：(車夫部屋から飛び出して来る) やめろ、やめるんだ！ (二強子に向かって) 恥づかしくないのか！ (ゼーゼーと息をつき体を丸め机につかまる) 俺は薬を飲んで汗を出していたんだ。あっちでずっと我慢して聞いていた……ゴホゴホ……。 (激しく咳き込む)

劉四爺：(怒って立ち上がる) 二強子、わしのうちはお前が女房をぶん殴る所じゃないぞ。お前ら、つけあがるのもいい加減にしろ。

二強子：旦那、白黒つけてくれ！……

劉四爺：失せろ！ お前らの白黒なんか勝手に外で決めろ！ (二強子にびんたを食らわす)

二強子：(劉四爺からびんたされ面子をつぶされ、ぱっと二強嫂の腕をつかむ) 行くぞ！ 外に出ろ。言うことをきくようにしてやる！

小福子：お父ちゃん、お母ちゃん……。

二強子は、小鳥でもつかむように、二強嫂を引きずり出す。

小福子：(劉四爺の足下にバツとひざまずく) 旦那さま……。

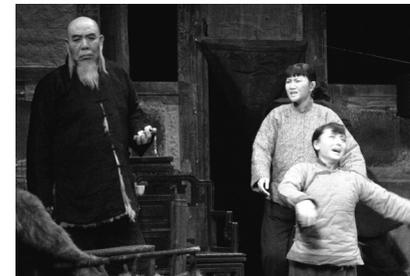
虎 姐：父ちゃん……。

小福子：(虎姐に救いを求める) 虎ねえさん、何とかして。

劉四爺：虎姐！ 余計なことをするんじゃないぞ。



二強嫂：私も殺してくれ



劉四爺：虎姐！ 余計なことをするんじゃないぞ